

講演：寺脇研氏（文化庁文化部長 前、文部科学省審議官生涯学習担当）

寺脇氏 この融合研フォーラムには毎年うかがっている。（この融合研は）一番意識の高い、かつ豊かな実践をしている。だからこそ、その（学社融合の）話はしたくない。他のところなら前任の話をしますが、ここ（融合研）はレベルの高いところだし、昨日からみなさん、学社融合の話はしてるでしょう。（寺脇氏は8月1日づけで「もう生涯学習担当ではない」し、前任の話は毎年ここに来て話しているし）もっと先の話をしたい。

学社融合は手段であって目的ではない。手段が目的化するの「官僚制」である。「官僚制」は官僚（役人）によってだけなされるものではない。「学校を子どもの教育以外には使えない（使わせない）」。なるほど、これは明らかに官僚制である。（「手段」に固執することなく、「目的」がどう達成するかが重要だということ。その話）。文化庁長官自身の言葉に（文化庁の仕事は？）「バカを撲滅（？）していく運動」というのがあった。（「手段」を「目的」とはきちがえるような「バカ」）。「文化」=目的を達成するためのものであり、より柔軟なものである（？）。

（「文化」・「文化的な生活」=「目的」？あるいは「文化」=官僚制に陥らない目的達成のあり方？-いづれにせよ寺脇氏は「文化」というものを強調している）。

「学社融合」の仕事は今年4月で終わった。完全学校週5日制が導入（でき）され、生涯学習の視点に立たないとできないカリキュラムが取り入れられた、からである。もう勝負はついている。社会教育の方は元気で、学校教育の方は勝手の違う中で右往左往している。（寺脇氏は）4-7月の間、この様子を見るのを楽しみにしていた。

（文科省（の役人）としては、完全5日制の導入・カリキュラムの変更とやることはやった、その時点で文科省の仕事は終わっている）

ある市長（佐世保市？）は、福祉は市町村で教育は国でやるべきと考えていた。しかし市長に（実際に）なるとそう切り離せるものではないことに気づく（と言っていた？）。このように明敏な市長・村長さんたちは気づき始めている。公共施設（学校=国のやる-ことを決める-べき？）は185日（しか開いていない）。それ以外の日は（各地域=市町村でやる・各家庭でやる？）格差が出て当然ということになる。それが「地方分権」ということであろう。（「それがなきゃ国でやるのか」-文脈喪失）完全学校週5日制において、休みの日に学校がなんかやるのではなく、スッパリと学校を切って、「学校もやりたければやれば」（くらいでいい。このとき学校でやるのが強制になってはいけない。来たい人が来ればいいので多寡の問題でもない-最後の文は私見）。

学校の強制に関して例えば奉仕体験-学校がやらなきゃ・学校で評価しなきゃ（という議論がある）。「学校が、学校が」、なんとなく「学校がやってくれる」というものである。中教審ではこんなこと言っていない。国民が合意しているのは、子どもたちがボランティアをやることはよい・それを強制することはよくない・きっかけをつくることは必要・きっかけを強制にはいけない、というもので教育国民会議で話されている。なのに「学校が、学校が...」。このように学校を中心としてはとらないことが必要である。学校がやるんだったら強制。学校でやらないのが、社会教育でやるのが、一番いい（？）。（この後文脈を見失う。メモにあるのだけを記しておく（順不明））、

- ・それはちがう。それは強制（にかかっているのかも）。
- ・教えなければいけない義務はあるが学ぶ義務はない。
- ・学教は教えたくてしょうがない - 強制 - こういう教師に対して外部評価を行う - 京都市では 100 人単位で配転の取り組み - 京都市ではそうだがそうでないところもあって - 分権。
- ・社教でやる機会が少ない - しょうがないのでそうせざるをえない。

文科省において、社会教育の指導主事と学校教育の指導主事が一同に会することがあった。社 - 地域の中で、あるいは学 - 学校の中で、奉仕活動をやろうという話である。半分はニコニコして、半分は仏頂面であった。それが混在していた。そこで私（寺脇）は「この中で誰が社会教育の人で誰が学校教育の人かあててみよう」と言った。半分の人が爆笑した。「はい今笑った人は社会教育の人ですね」。これは「さあ、やろう」という人と「えらいこっちゃ」という人の違いである。こんなことは今までなかった。時代が変化した現れである。（以下メモからの類推 - 中教審の前には学校教育が強かった。それ以外の人たちは「なんでそんなこと考えるのか」とされた。いわば学教 - ポジティブ、社教 - ネガティブであったが、それが今逆転している）。

完全学校週 5 日制導入について教員に賛否があるわけではない。92%は 5 日制がよかったとしている（教員？）。土曜日が休みになったので月 - 金が忙しくなるのは当たり前である。昔はどの官庁も土曜日もあった。そのころは確かにゆっくりしていた。しかし土曜日が休みになると金曜日にやっておかないと仕事が 3 日も遅れてしまう。そのため死に物狂いで仕事をやるようになる。（確かに忙しいが）それでは元に戻せとは言わない。（教員の方も）そんなに忙しいのであれば、夏休み中の（あやしげな）研修（なんかより）土曜日にやっていた行事を夏休みにやればいい。月 - 金はせわしなくなっている。それは子どもも同じである。それまでの××（メモ判読不能）ゆとりありすぎである。

（さて、今日の教育の制度的変革の中で）様々な人のふれあいが可能となった。子どもたちは変化に対応ができるだろう。ぶつくさぶつくさ、言うのは文化的に劣っている証左である。「もっと文化的な社会にしましょう」（というのが今日の変革である）。もともと憲法においても教育基本法においても「文化国家」とか「豊かな文化」とかと記されていて、「算数ができるように」などとは書かれていない。もちろん学術も「文化」の中に入るだろうが、「文化」は目先の利得（＝「文明」 - 寺脇氏）に即、つながるもの（ばかり？）ではない。「学力低下」「知識低下」なんてものは、「文化」の文脈にあるものではない。

（損得＝「文明」と、そうでないもの＝「文化」について、以下の話）

学校で奉仕活動を評価する。子ども - 「先生、こんなに頑張ったよ」、教師 - 「うい奴じゃ」といったようなこと（があるとしても）、学校はその一面を見ているに過ぎない。ある子どもは学校とは無縁のところ、家で 365 日おばあちゃんの世話をしているかもしれない。学校でやったボランティア活動だけしか、学校には見えないという意味で、ある一面である。（この話を前後の話と結びつけるために記録者の類推 - 学校での評価はボランティア活動をやることを損か得かの問題にする。これは算数ができるれば得で、できないと損というのと同じようなものだ。しかし教育変革の目指す「文化」はそういう損得とは違うところを目指している。得だからやってもらいたいわけでもないし、氏のいうように

全てを網羅することもできない(できたら怖い)。学校での評価の議論は氏のいう変革以前の学校中心の考え方の残滓であろう)。そんなふうには評価されて、それによって高校の合否が決められるのであれば、そんな高校行きたくもない、行かないでいい。今はそういう状況にある。無理難題をふっかけてくる学校なんて(相手にしなくても生きていける?)。

自分にとって素晴らしいか素晴らしいかを考える、これが「文化」である。これに対して自分にとってあっちに行けば得か得じゃないかを考える、これが「文明」である。損得でものを考えること、損かもしれないが快適である・得だけど不快であるといった快不快でものを考えること、この対立、時間の変化を認めたくない人との対立が(今)あるのである。これは大変なことになってきた。

1 足す 1 は誰がやっても同じであり(損得は例えば経済での数値のようにだれが見ても言っても聞いても同じである)、1 回で済むもの(誰がやっても同じだから 1 回の検証で「わかる」ものである)であるが、そうしたものの考え方は「文化的」事項ではない。(快・不快は時・場所・人によって異なり、その都度「わかる」度合いも違うものである - この話次の2つのエピソードの後だったかもしれない - 記録者)。

『10代しゃべる場(?)』というテレビ番組に出た(?)。それへの感想が笑っちゃうほど2つに分かれた。「よかった」という人と、(寺脇氏が「かわいそう」「ざまあみろ」という意味で無言でいる人)とにである。あーいうふうに大人と子どもが話すこともあるんだね(という感想?)、余談になるが、子どもと話すスタンスというのは(これまで)1つしかなかったのでは、とも思う。威圧的に、フレンドリイに、控え目に(文脈失念)。(その番組での話?)。なんで改革をするのか - この世の中のバリア(差別)をなくそうとするため、教育の目的である文化の進展のため、というようなことを述べた。すると子どもの方からは「信じられない」と言われる。「あらゆる差別があった方があなたは得でしょ」と言われる。なるほど大人ってのは、損得でしか動かないと思われているんだと私(寺脇氏)は思った(学歴 - 寺脇氏や教師は持っている - による利得があった方が持っている人には都合がいいだろうし、「男性」であること、その他いろいろ...)。私(寺脇氏)が言っただけではダメだ。教師が言っただけでもダメだ。そこに教師でも役人でもない人々の手助けが必要となる(自分で全部やれると思っている先生方はよっぽど天才かバカかではないでしょう)。

で、この4月からの4ヶ月間、気楽にやっけていまして、総合的学習の時間のゲストティーチャー - として呼ばれる機会があった。地域社会の一員としての自分として(参加した)。そこで学校の先生は、私(寺脇氏)のことを「この人はエライ人だ」と紹介した。子どもたちはキョトンとしている。なぜ「エライ」かはどうも説明できないようだが(エライくないんだから当然だが(笑))。どうもそこには上下の思想がある。言えないのか言わないのか、おそらくこういうことだ。子どもたちに対して、子どもと先生とでは「先生の方がエライでしょ」、この人(寺脇氏)は先生の先生のそのまた先生にあたるぐらいのお人なんですよということ。そのように紹介されて、私(寺脇氏)は、次のように言った。私(寺脇氏)も先生も同じ、社会の人のために働く公務員です。先生が教室を担当するように、私(寺脇氏)も日本の教育について(いくばくか)担当しています。担当が広いから、先生は私のことをエライなと思ったんでしょ、と。担当の狭い広いがある、それは地域の狭い広いでもある。教室 - 小学校区 - 市町村 - 都道府県 - 日本全体と。そのそれぞれの領

域内に様々な人々がいる。地域エゴもある（エゴのぶつかりあいもあったりする - その領域の色々な人たちに対して担当すること？ - 公務員の仕事？）。先生の「エライ人」は勘違いであるが、そこから子供たちに - 地域はひろがりをもっている - ことを理解してもらおうとした。

（ 文脈失念のためメモにあることだけ ）

小学校区 - 京都全体 - 日本全体 - このことを理解

総合的学習というシステム

役人だったら同様のことを言うだろう

地域エゴが困る      あなたの責任があるでしょ

金魚の世話      役人 = 飼育係      みなさん忙しいだろうから      金魚に対する責任

（寺脇氏の話した）次の時間、目の不自由な人がゲストティーチャ - であった。それではじめて子どもたちは、腑に落ちたようであった。目の不自由なおっちゃんが（寺脇氏と同様に地域の広がりについて - だったかは失念）同じことを言ったので。私（寺脇氏）が言っただけではダメだったということ。

（今日の改革は）子どもたちにとっては「やってみたら得」なものである。例えば「プレイパーク」。子どもは「大人化」していると言われるが、そうした子ども自身が遊んでいる。ほったらしておけば、昔の子どもと同じように、木にのぼる、隠れ家、高いところから飛び降りる、といったことを行う。意地悪な人は、「そういう（ことがもともと好きな）子どもだからプレイパークに来るんだ」と言うかもしれない。市川のある学校で70年前に子どもが木登りをしている写真に次のような説明がついていた。「昔の子どもは木登りが好きだった」。今の子どもだって（したことがないだけで・してみれば？）「木登りは好きか」と聞けば8割は「好き」と答える。子どもたちから「外遊び」「木登り」の場を奪ったのは誰か、というより「損得」の勘定でやってきた（のがこれまでだった、しかし）。

完全学校週5日制に対して前述のように教師の92%が賛成だった反面、大人（だいたい親にしか聞いていないのだが）の賛成は3割に留まった。私（寺脇氏）は「3割も賛成してくれたんだ」という感想を持つ。なぜなら、親にとっては損であるのに - タダで土曜日子どもを預けることができているところ、一方的なサービスの打ち切りに対して3割も賛成ということであるから。この感想は教育業界にはピンとこない（ようだ）。しかし首長さんたちは「こりゃすごい」と言う。3割もあれば当選できてしまう。このことから、この社会は、本当には「文化」をすてていない、「文化」を失うことを恐れている、この社会は捨てたもんじゃ無いということがわかるであろう。完全学校週5日制導入は親にとって不利なのに、子どもがハッピー = 親もハッピーということになるわけだから（少なくとも3割は）。大人の意見の3割は「よい」、4割は「こまった」、3割は「どっちがいいかわからない」となっている。

むしろ、親でも教師でもないのに週5日制反対というのは、どういうことなのだろうか。学力低下の議論をまにうけて「そりゃまずい」と思っているのだろうか。学力低下の問題は指導要領の問題であって5日制の問題ではない。損得 = 学力であれば、いや違うのではないか（？今日の改革はそういうものを目指していない、それで合意されたはず？）。そもそも子どもたちはなんで勉強（するんだろう、させられるんだろう、しなければいけな

いんだらう - 子供たち自身の了解？社会的意義？で以下の話（ ）。

三鷹のある小学校の話。「自分の夢をみんなで話そう」というテーマの授業があった。このとき（寺脇氏は）総合的学習おそるべしと思った。上記テーマのためには、子どもが恥ずかしがらずに自分の考えを述べる必要がある（＝生きる力、それができている）。偶然かもしれないが、みんな違った夢を述べていた。なりたい理由も話さなければいけず、コミュニケーション能力を必要とする（それもできている）。だれも「そんな夢無理だ」という人もいなかった。すなわち違いのあることを認め合うこともできていた。「じゃ、それになるにはどうすればいいのか」をみんなで考える。親や先生は責任があるからそんな無理だということかもしれない（それはそれでしょうがない）。だが思っているのをやめればそこで終わりである。そこで出てくる（子どもたちが考える）結論は、学校の勉強をしなければいけない、ということになった。ちなみにテストのこれでは になれないとか。（次の文脈失念 - ）世の中には日ごろ見かけない人...。今日の社会は少子化社会である。我々の社会は、夢のない社会であると思っているのだから（子どもたちは夢を持っており、そのために勉強する・努力することをこれからもするだろう。学力低下を危惧する人たちは何を心配しているのだから）。

文化庁の20代職員との飲み会の席で「文化とは何かを考えて下さい」と私（寺脇氏）は言う。「考えることは誰でもできる。答えは知らない」。憲法にも教育基本法にも「文化」について言及がある（そのように日本社会においても、あるいは教育に関することにおいても「文化とは...」とは基本的な問題なのだ）。私も人のことは言えない。8月になってから考えるようになったのだから。

埼玉の旧大宮市では土曜日2校しか学校を開けているところはない。公民館・図書館の80数%が開いているのに対して。これらは本来は子どものためだけではないが、子どもたちのほうから開いている（よく利用している）。（以下文脈失念・学校 - 「開いている」と言うな・学力が低下してしまう・いくら知らないと...・もう伝わっている...）。「だって事故が起こったら困る」と（開かない方は）言う。そりゃ困るだろう。それじゃ公園も閉めなきゃ、月・金もしめなきゃ - 市民の皆さんがそれでいいならそれでいい。4月の後は、その自治体の判断に委ねられたわけであるから。（いろいろあって）マスコミには文化庁に赴任したことに対して「道半ば」と言われるが、3月で（氏の仕事は）もう終わっていた。4月からの4ヶ月は楽しかった。これからは「文化」である。

最後に

「学社融合」という言葉はほんとに嫌いである。なんで「学」が先なんだろう。この部分に関して文科省はよくなっていない。これからは「社学融合」であろう。ここ最近（岸氏が述べるように）首長さんが教育に入っていき、福祉に入っていきとしている（学校教育が先というのではなく、地域社会からのアプローチもあり、比べればそもそもそっちの方がデカイ）。

最後に（文脈失念メモそのまま記述）

- ・自分のお金を自分の子どもに使うことの楽しさ
- ・学社 - 情報公開、説明責任
- ・あんたの教育理念のために学校があるんじゃないよ

そとではできない話ができると思ったので、言葉が過ぎたところもあるかもしれませんが、これからの教育・社会のヒントとして聞いて下さい。

以上